

適正施設ガイドライン

【ムサシトミヨ *Pungitius sp.*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

1 飼育環境

1-1 水温

冷水性の魚のため、成魚・未成魚共に、周年飼育水温を低く保つ（15℃～17℃）。

クーラーを用いて適正水温を維持するならば室内飼育が可能である。屋外飼育の場合も同様である。しかし、一日のうちに、温度変化が急激な場所は適さない。

1-2 設置場所

上記の温度条件を満たす場所が望ましい。また、水槽の前を頻繁に人が行きかう場所などでは、魚が落ち着かず営巣しないことがあるので、避けた方が良い。

やむを得ず設置する場合は、水槽に目隠しや通路側ガラスのコケを残す等の工夫が必要である。

1-3 照明（日照、人工照明、照明時間長）

照明は自然光、人工照明（蛍光灯、LED 灯、ハロゲン灯など）のどちらでも良い。飼育水槽に直射日光が当たる場合は、水温が急激に変化する恐れがあるので注意しなければならない。また、光が強ければ、水槽内に藻類が発生しやすくなるので、メンテナンスの手間も考えなければならない。照明時間は夏と冬で自然日長にあわせるとよい。

1-4 水槽サイズ（面積、容積）

魚の成長により飼育水槽を、変更することが必要である。卵・ふ化仔稚魚の場合、45 cm水槽（45×20×20 cm容量 18ℓ）の水槽で 30 個体ほど飼育できるが、成長に伴い個体数を減らすか、容積の大きな水槽に移動する必要がある。未成魚は、60 cm水槽（60×30×35 cm、容量 63ℓ）で、10～30 個体ほどで飼育することが望ましい。一時的になら FRP 水槽（180×60×60 cm、容量 648ℓ）で 200～300 個体の収容が可能であるが長期は難しい。成魚の水槽も未成魚に準ずるが、成熟したオス個体が出た場合は縄張り争いを避けるため、飼育密度を下げる必要がある。

1-5 構造、設備、水槽の数

成魚・未成魚の畜養飼育では、水槽の水底に砂などは敷かない。繁殖水槽の場合川砂、大磯砂利のような物を敷き巣材となる水生植物を植え込む。縄張りを作るため巣材用水草などのレイアウトに気をつける。

卵・仔稚魚の場合は、水槽内に何も入れない。地下水掛け流しの場合、濾過装置は特に必要ないが、循環水で飼育する場合は濾過槽を設置し、定期的に換水を行う必要がある。

1-6 飼育水（水質）

他の魚種でも飼育用に利用している地下水または塩素を中和した水道水でよい。pH は、弱アルカリ～中性で、酸性に傾かないように気をつける。



写真1 飼育水槽

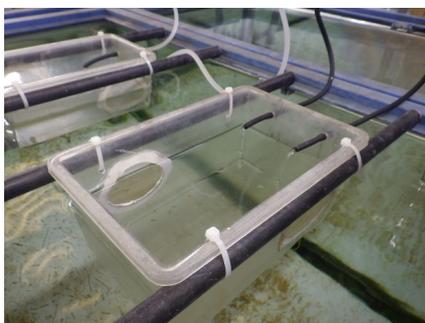


写真2 稚魚・未成魚の飼育水槽



写真3 成魚飼育水槽